

エストニア共和国国会、ラトビア共和国国会及びリトアニア共和国国会の招待による各国公式訪問並びに各国の政治経済事情等視察参議院副議長一行報告書

団	長	参議院副議長	長浜	博行
		参議院議員	山本	順三
		同	田名部	匡代
		同	横山	信一
		同	川合	孝典
		同	井上	哲士
同	行	議事部長	八楸	敬嗣
		副議長秘書	外川	裕之
		参事	真先	剛史

一、始めに（派遣の概要）

長浜博行参議院副議長一行は、令和五年八月二十一日から三十一日までの間、エストニア共和国トーマス・キヴィマギ国会第一副議長、ラトビア共和国ザンダ・カルニニャールカシェヴィツァ国会副議長、リトアニア共和国ヴィタウタス・ミタラス国会副議長の招待により、バルト諸国を公式訪問した。

一行は、三国の議会及び政府要人（議長、副議長、議連会長、首相、国防大臣、官房長官等）との会談及び公式食事会において、二国間関係、地域情勢、エネルギー、環境、防衛、農業、教育、自治体間交流など様々な議題について意見交換を行った。とりわけ、バルト諸国が隣接するロシア情勢やウクライナ支援に焦点が当てられ、国際安全保障環境が厳しさを増す中、平和秩序を守り抜くためには、NATO加盟国であるバルト諸国を始め、価値観と原則を共有する同志国との結束の強化が必要であるとの認識で一致した。ソ連等による占領と抑圧の歴史的苦難を経験したバルト諸国は「ロシアによるウクライナ占領を許せば次に侵攻されるのは自分たち」との強い危機感を持ってウクライナ支援を継続しており、各要人からは、日本のウクライナに対する支援に謝意が示された。

また、一行は会談の合間を縫って現地視察を行い、ICT先進国であるエストニアでは、電子政府の取組や、茨城県境町に自動運転電気自動車を出荷するスタートアップ企業、サイバーテロ対策関連企業等を視察し、バルト海の運輸・物流の拠点であるラトビアでは、リガ港の港湾ターミナル運営企業やエネルギー関連施設等を視察した。さらにリトアニアでは、杉原千畝氏がユダヤ系避難民等に「命のビザ」を発給した在カウナス日本領事館（現在は杉原記念館）を訪問し、同記念館を運営する杉原「命の外交官」財団理事長等を招いて昼食会を主催したほか、カウナス市で日本語教育を実施する大学を訪問し、リトアニア人学生等と意見交換を行った。

以下、長浜副議長一行の派遣日程と共に各会談・視察等の概要を報告する。

二、日程

八月二十一日（月）

東京発、パリ経由、タリン着

八月二十二日（火）

e エストニア・ブリーフィングセンター視察、オーヴ・テック社視察、エストニア在留邦人・元エストニア国会議員との昼食会、歴史博物館視察、旧KGB独房視察、在エストニア日本大使館による現地情勢ブリーフィング

八月二十三日（水）

キヴィマギ・エストニア国会第一副議長等との会談、エストニア国会視察、カリュライド対日友好議員連盟会長主催昼食会、ペフクル・エストニア国防大臣との会談、サイベクサー社視察

八月二十四日（木）

エストニア大統領官邸等視察、タリン発、リガ着、在ラトビア日本大使館による現地情勢ブリーフィング

八月二十五日（金）

ムールニエツェ・ラトビア国防大臣との会談、ベルグマニス対日友好議員連盟会長等との会談、ラトビア国会視察、カルニニャ＝ルカシェヴィツァ・ラトビア国会副議長主催昼食会、カリンシュ・ラトビア首相との会談、リガ・ユニバーサル・ターミナル社視察、ラトビア国会副議長等を招いての長浜副議長主催答礼夕食会

八月二十六日（土）

インチュカルンス天然ガス地下貯蔵施設視察、占領博物館視察、ラトビア在留邦人との夕食会

八月二十七日（日）

ラトビア中央市場視察、リガ発、ビリニュス着、在リトアニア日本大使館による現地情勢ブリーフィング

八月二十八日（月）

バルチャーティエ・リトアニア官房長官等との会談、アンタカルニス墓地への献花、ミタラス・リトアニア国会副議長主催昼食会、ヴァリンスカス対日友好議員連盟会長等との会談、チュミリーテ・ニールセン・リトアニア国会議長等との会談、リトアニア国会視察

八月二十九日（火）

杉原記念館視察、杉原「命の外交官」財団理事長等との昼食会、ヴィータウタス・マグヌス大学視察、第九要塞（旧ユダヤ人収容所）視察

八月三十日（水）

ビリニュス発、ヘルシンキ経由、在フィンランド日本大使館による現地情勢ブリーフィング、機中泊

八月三十一日（木）

東京着

三、エストニア共和国

(一) キヴィマギ・エストニア国会第一副議長等との会談

二十三日午前、一行は、キヴィマギ副議長との会談のため、エストニア国会を訪問した。

国会正玄関にてキヴィマギ副議長による出迎えを受けた後、ライモンド・カリユライド対日友好議員連盟会長も同席し、キヴィマギ副議長との会談が行われた。

会談冒頭、キヴィマギ副議長は、長浜副議長一行を歓迎した上で、エストニアと日本は歴史的、文化的な背景こそ違いますが、民主主義という同じ価値観を共有しており、ウクライナや世界の平和のために貢献し続けている日本は非常に重要な国である旨述べた。また、ウクライナとロシアの戦争は民主主義と権威主義の戦いであり、ロシアがこの戦争を制すれば、更に別の民主主義国を侵略することから、ウクライナ戦争は自分たちの戦争であるとの認識を示し、日本によるウクライナへの支援に謝意を示した。

これに対し長浜副議長は、キヴィマギ副議長の招待により、参議院の副議長として初めてエストニアを公式訪問できたことは誠に名誉なことである旨謝意を示した上で、ウクライナ情勢について、本年五月のG7広島サミットにて、各国が結束してあらゆる側面からウクライナを力強く支援し、対露制裁を継続していくことを改めて確認したが、力による現状変更は決して許されず、価値観を共有する同志国として、エストニアを始めNATO加盟国等との緊密な連携が重要である旨強調した。

次に山本議員から、エストニア国内にはロシア系住民が二割強いるが、国民間の確執が生じる危険性について質問した。これに対しカリユライド議連会長から、ロシア系住民の多くがエストニアやNATOの考えに同調しており、経済・生活水準、健康・福祉等の面でも西側の方が良いと理解している旨、また、キヴィマギ副議長から、ロシアと国境を接し、ロシア系住民が多く住む都市でロシアの記念碑を撤去する動きがあったが、ロシア系住民から反対の声はなく、国民間で確執が生じる可能性は低いと認識している旨回答があった。

日本国民の長寿の理由や環境対策としての自動車税のほか、エストニア政府が二〇二五年の大阪・関西万博へ不参加を決めたことも話題となり、キヴィマギ副議長は、政府の方針に反対しており、万博まで時間は限られているものの、国会で議論し、参加に向けて努力するとの意向を示した。

会談終了後、一行は、エストニア国会儀典担当の案内により、本会議場を視察した。

(二) カリユライド対日友好議員連盟会長主催昼食会

二十三日、カリユライド議連会長主催昼食会が開催され、同会長、ユリ・ラタス第二副議長（元エストニア首相、元国会議長）を始め七名の議連会員及び一時帰国中のマイト・マルティンソン駐日エストニア大使が出席した。

冒頭、長浜副議長は、日本に関心を有する議連会員の皆様と対話の機会を得られたことに感謝するとともに、ウクライナ情勢が緊迫しているが、大国を挟んで隣同士である日本とエストニアの間で、幅広い分野での交流が一層活発になることを期待する旨挨拶した。

昼食会は和やかな雰囲気の中で行われ、両国議員は、電子政府エストニアの取組、ロシア及び中国の軍事的連携の動き、中国及び台湾をめぐる情勢、ALPS処理水の海洋放出、日中・日韓関係、デジタル化と雇用への影響、両国の女性の政治参画等について、意見交換を行った。

(三) ペフクル・エストニア国防大臣との会談

二十三日午後、一行は、ハンノ・ペフクル国防大臣との会談のため、エストニア国防省を訪問した。

会談冒頭、ペフクル国防大臣は、両国は同志国であり、ウクライナ問題について同じ認識でいることを嬉しく思う旨述べ、G7広島サミットの「ウクライナに関するG7首脳声明」発出の際の日本の貢献を評価するとともに、ロシアのウクライナ侵攻に対する対応が欧州・世界の安全保障状況を決めるとの認識を示した。また、両国の協力分野として、サイバー、防衛、教育を挙げたほか、中国の動向について見解を求めた。

これに対し長浜副議長は、ロシアによるウクライナ侵略は国際秩序の根幹を揺るがす暴挙であり、多くのウクライナ市民が犠牲となっていることに深刻な懸念を表明するとともに、平和秩序を守り抜くためには国際社会の結束が必要である旨応じた。また、中国の力による一方的な現状変更の試みや中露の軍事的連携の動きなど憂慮すべき事態に言及し、中国には、懸念や課題など主張すべきは主張し、国際社会の責任ある一員としての行動を求めつつ、建設的かつ安定的な関係を構築することが重要である旨説明した。ペフクル国防大臣は賛意を示し、中国の技術や経済的影響力、中露の連携強化は大きな懸案事項であり、日本の持つ中国に関する情報や知識は極めて有益である旨述べた。

次に山本議員から、ロシアのウクライナ侵略により、エストニアの国防体制がどのように変化したか、また、中国に関心を示す背景について質問したところ、ペフクル国防大臣から、ウクライナの戦争は我々の戦争であり、防衛予算を二倍に引き上げ、武器の調達を強化するとともに、NATOの新たな地域計画の策定を働きかけ承認されたが、ロシアの戦略的目標は欧州を東西に分断することであり、ロシアは決して変わることはない旨、エストニアでは中国政府のために働くエストニア人スパイが見付かったほか、携帯電話のバックドア技術など情報の取得手段等を懸念している旨回答があった。続けて、川合議員から、サイバー攻撃に対して、先手を打って攻撃側の目的を阻止する「積極的サイバーセキュリティ防御」について、可能な範囲で見解を求めたところ、ペフクル国防大臣は、その点については話すことができないが、エストニアは二〇〇七年に世界で初めて大規模サイバー攻撃を受けた国であり、政府のみでサイバー攻撃に対処することは

不可能であると身をもって経験し、国と民間企業が協力する枠組みを構築している旨回答した。

(四) エストニアにおける現地視察等

二十二日午前、一行は、eエストニア・ブリーフィングセンターを視察し、電子政府エストニアの取組について説明を受けた。同国では十五歳以上の全ての国民・居住者に国民IDカードを交付し、ほぼ全ての行政手続がオンラインで完結できる。(紙ベースでの手続も選択可。電子手続ができないのは離婚のみ)。自分の個人情報に不審なアクセスがあれば政府に報告できることで透明性を確保し、また、他国からの侵略、自然災害等による甚大な被害を想定し、国民の基幹データのコピーを同盟国であるルクセンブルクのサーバーに保管する等の取組を行っている。質疑応答の中で、電子化が進んだ背景として、多くの国民が電子化のメリットを理解し、小さなミスに寛容であるほか、国の規模が小さく、独立時に既得権益がなかったため新しい取組が進みやすかった等の説明があった。

引き続き一行は、自動運転電気自動車を開発するオーヴ・テック社を視察した。同社が開発した自動運転自動車は、一定条件下で無人運転が可能な「レベル4」に対応し、茨城県境町がコミュニティバスとして年内の導入を計画している。ターヴィ・ロイヴァス取締役会長(元エストニア首相)等から、少子高齢化や職業運転手不足が進む中、日本の地方自治体のニーズ及び日本市場に合わせた車両を開発しており、遠隔監視システムを提供する日本企業とも連携し普及を図りたい等の説明を受けた後、一行は、実際に日本に出荷される製品を見学し、公道にて自動運転電気自動車に試乗した。

その後、一行は、エストニアの在留邦人や元国会議員(把瑠都関)を招いて昼食懇談会を行ったほか、エストニア歴史博物館、旧KGB独房を視察し、大国の支配を経て独立を回復した同国の歴史等について認識を深めた。

二十三日午後、一行は、サイバーテロ対策関連企業であるサイベクサー社を視察した。同社は、サイバー攻撃に対抗するための訓練を各国の政府機関や民間企業に対して実施している。二〇〇七年にエストニアが大規模サイバー攻撃を受けた際に国防次官として事態の收拾に当たったラウリ・アルマン取締役会長から、デジタル化の成功に重要なことは、政府、民間企業、国民の信頼関係の構築、国民への情報提供、透明性の確保であり、サイバーの脅威は日々変化するため、特定の脅威に費用を掛けるのではなく、脅威を理解するための訓練が重要である等の説明があった。

四、ラトビア共和国

(一) ムールニエツェ・ラトビア国防大臣との会談

二十五日午前、一行は、イナーラ・ムールニエツェ国防大臣との会談のため、ラトビア国防省を訪問した。

会談冒頭、ムールニエツェ国防大臣は、価値観を共有する同志国であるラトビ

アと日本の議員間交流の意義は極めて大きく、今後も二国間関係を深めていきたい旨述べるとともに、日本のウクライナ支援や対露制裁に謝意を示した。また、ラトビアはウクライナに対し、GDP比一%以上の軍事支援を実施していることを紹介し、支援継続のために防衛産業の維持・強化が重要であると述べ、日本との協力に期待を示した。さらに、民主主義や法の支配に基づく秩序に反してウクライナへの攻撃を続けているロシアは、戦争犯罪の責任を取る必要があり、国際刑事裁判所において、又は国際特別法廷の設立により、裁かれる必要がある旨指摘した。ウクライナの勝利とは、同国が戦争で失った地域の奪還であり、そのためには多くの支援が必要であるが、今後三年から五年は続くと思われる戦争の長期化に伴い、経済も苦しい状況にあるほか、ロシアと中国の軍事協力を警戒している等の発言があった。

長浜副議長は、ムールニエツェ国防大臣による詳細な説明及び同大臣が国会議長時代に参議院を訪問し、その後も日本との関係強化に関心を寄せていただいていることに対して謝意を示した。また、ウクライナ侵攻に関し、唯一の戦争被爆国として、ロシアによる核の脅しを深刻に懸念し、その使用は決してあってはならない旨強調し、国際社会が結束して断固たる決意で対応していく必要がある旨述べたところ、ムールニエツェ国防大臣から、両国は共通の認識を有しており、今後も更に連携を深めていきたいとの意向を示した。

(二) ベルグマニス対日友好議員連盟会長等との会談

二十五日午前、一行は、ラトビア国会を訪問し、ライモンズ・ベルグマニス対日友好議員連盟会長を始め八名の議連会員と会談した。

会談冒頭、ベルグマニス議連会長から、日本のウクライナ支援、本年七月の中曽根弘文日本ラトビア友好議員連盟会長一行のラトビア訪問や、先般リトアニアで開催されたNATOサミットへの日本の参加に謝意が示されるとともに、現在ラトビア国会は閉会中だが、本日は議連会員の多くが出席しており、防衛やサイバー安全保障分野等での協力を念頭に率直な意見交換を行いたい旨発言があった。

長浜副議長は、議連会長及び会員による歓迎に謝意を示すとともに、国際安全保障環境が厳しさを増す中、価値や原則を共有するラトビアや国際社会との緊密な連携がこれまで以上に必要であり、今回の議員同士の交流を一つの契機として協力関係を更に発展させていきたい旨述べた。

引き続き山本議員から、中曽根議連会長からラトビア訪問について話を聞いており、両国の協力関係を更に深めていきたい旨、田名部議員から、所属する農林水産委員会等でも議論しているが、日本は食料自給率が低く、ウクライナ情勢に伴い、食料安全保障の確保が課題である旨、横山議員から、日本は西側諸国と協調しウクライナを支援するとともに、ロシアを強く非難し、対露制裁を実施しているが、日露の漁業には長い歴史があり、水産物は制裁に含まれておらず、また日本は武器輸出が禁じられていることから日本独自の役割で問題解決や戦後復興

に貢献していく旨、川合議員から、ロシア及び中国の行為により緊迫する国際情勢について、両国の隣国として強く懸念するとともに、現代の戦争は物理的な攻撃の前にサイバー攻撃が行われると理解していることから、サイバー防衛に関心があり、ロシアと国境を接するラトビアとは同じ立場で議論及び連携したい旨、井上議員から、日本共産党はソ連共産党の横暴と厳しく戦い、自由及び民主主義を求める立場は皆様と同じであり、また、自分は広島育ちの被爆二世であり、核兵器廃絶に向けて積極的に取り組んでいる旨、それぞれ発言があった。

その後、両国議員は、ラトビアの電力網のロシア依存からの脱却と再生可能エネルギーの促進に向けた日本との協力、原子力発電の是非、レールバルティカ計画による高速鉄道網整備、JETROの経済ミッションのラトビア訪問、人道面を含むウクライナ支援、両国の姉妹都市交流等について、意見交換を行った。

(三) カルニニャ＝ルカシェヴィツァ・ラトビア国会副議長主催昼食会

二十五日、議連との会談に引き続き、一行は、カルニニャ＝ルカシェヴィツァ・ラトビア国会副議長の案内により、本会議場を視察した後、国会内ゲストホールでの同副議長主催昼食会に出席した。ラトビア側からは、同副議長、ベルグマニス議連会長を始め五名の議員が出席した。

カルニニャ＝ルカシェヴィツァ副議長は、歓迎挨拶の中で、長浜副議長一行のラトビア訪問を契機に良好な両国関係の更なる発展への期待を表明した。また、両国は、出生率低下、防衛費の増加、攻撃的な隣国の存在など、国内外で類似の課題に直面していることを指摘するとともに、日本は、ウクライナ情勢への対応で協力できる最も重要なパートナーの一つであり、時宜を得た今回の訪問は、様々な重要テーマについて直接話し合う非常に良い機会である旨述べた。これに対し長浜副議長は、カルニニャ＝ルカシェヴィツァ副議長の招待によりラトビアを訪問できたことは光栄である旨謝意を示した。

昼食会において両国議員は、武器の輸出禁止等の制約がある中での日本のウクライナ支援の在り方、核兵器のない世界に向けた取組、農業分野での二国間協力、水素の利活用を含むエネルギー安全保障のための投資や経済協力の必要性、少子高齢化への対応と医療サービス提供の課題、戦争犯罪を裁く特別法廷設立の必要性、レールバルティカ高速鉄道網計画の進捗状況と民間企業間の協力、大阪・関西万博へのラトビアの参加等について、意見交換を行った。

(四) カリンシュ・ラトビア首相との会談

二十五日午後、一行は、アルトゥルス・クリシュヤニス・カリンシュ・ラトビア首相との会談のため、首相府を訪問した。

ラトビアでは、本年五月の大統領選挙で連立与党が候補を一本化することができず、連立政権内の関係が不安定化していたが、長浜副議長の訪問直前の八月十七日、カリンシュ首相はエドガルス・リンケービッチ大統領に辞表を提出し、受理された。(次期首相候補が国会で承認され、新内閣が発足するまでは、辞職後

も職務を継続)。

長浜副議長は、正に政情が動きつつあるこのタイミングで我々との会談を受け入れていただいたことは、カリンシュ首相が日本との関係を重要視しているあかしと捉えており、感謝申し上げますと述べたところ、カリンシュ首相は、ラトビアの現在の連立政権は政党間の意見の相違による課題が多く、今夏をかけて克服しようとしたがかなわず、国が必要としている政権を作るための最善の方法を考え、次世代に道を譲ることとした旨、今般、参議院副議長がラトビアを訪問すると聞き、新政権樹立に向けた調整よりも、大局的な視点から日本との二国間関係が重要と考え、何があっても会談は行うと心に決めていた旨述べた。また、民主主義のために政府のみならず草の根においても必要な支援を継続することを表明するとともに、ラトビアはソ連に占領された歴史があり、ラトビア人はウクライナで何が起きているかを本能的、直感的に理解できるが、日本はウクライナから遠く離れているにもかかわらず、共通の課題と考え対応し、正に「まさかの時の友こそ真の友」を体現しており、日本のウクライナ支援に心より感謝する旨述べた。

これに対し長浜副議長は、同志国として結束の強化が重要であり、我々が協力して国際秩序を守る必要があるとの認識を示すとともに、時期が来たら次の世代に道を譲るとのカリンシュ首相の政治哲学や民主主義の基本である草の根についての発言に触れ、政治家として感銘を受けた旨述べた。

最後にカリンシュ首相は、政権が替わっても、ウクライナ支援や二国間関係に関する方針が変わることはなく、日本からラトビアへの投資促進のための条件整備など、更なる関係強化のため引き続き尽力していくとの決意を示した。(その後、九月十五日、エビカ・シリニャ新首相が国会で承認され、カリンシュ前首相は新内閣で外務大臣に就任した)。

(五) 長浜副議長主催答礼夕食会

二十五日夜、長浜副議長は、カルニニャ＝ルカシェヴィツァ副議長等を招いて答礼夕食会を主催した。ラトビア側からは、同副議長のほか、ウクライナへの人道支援を行うNGO「開発協力のためのラトビア・プラットフォーム(LAPAS)」のイネセ・ヴァイヴァレ所長、リガ工科大学ターリス・ユフナ学長、ラトビア国会議長外交顧問、ラトビア外務省二国間関係局長が出席した。

冒頭、長浜副議長は、カルニニャ＝ルカシェヴィツァ副議長に対し、本日の昼食会に続き、懇談の時間を取っていただいたことに謝意を述べるとともに、今回の訪問を通じて得た貴重な経験を生かし、両国の協力関係が更に発展するよう尽力したい旨挨拶した。

これに対しカルニニャ＝ルカシェヴィツァ副議長は、ラトビアのNGO、大学及び外交の代表者も含めた夕食会への招待に謝意を示し、ロシアによるウクライナ侵攻については、いかにしてロシアに責任を取らせるかが重要であり、ウクライナ問題のほか、二国間関係、議会間交流、科学・学術交流等の重要なテーマ

について昼食会に引き続き意見交換を行い、両国の友情と協力関係を一層深めたい旨応じた。

ラトビア外務省局長からは、二〇一四年まではラトビアとロシアの間で経済・文化交流も行われていたが、同年のロシアによるクリミア併合により、ロシアが過去にバルト諸国に対して行ったことをウクライナでも繰り返そうとしていることが分かり、占領の五十年というラトビアにとって最悪の記憶がよみがえった等の説明があり、国際秩序の根幹が挑戦を受けている今こそ、同志国との連携が必要である旨強調した。

その後、LAPASによるウクライナに対する人道支援と政府との連携、戦争犯罪を追及する特別法廷設立の必要性、G7ウクライナ支援宣言へのラトビアの参加、中露のプロパガンダやフェイクニュースへの対応、ラトビア国内のロシア系住民への対応、ウクライナ支援に関するグローバルサウスへの働きかけ、リガ工科大学と東京大学とのAIに関する共同研究、両国の留学生交流、女性の政治参画等について意見交換が行われた。

(六) ラトビアにおける現地視察等

二十五日午後、一行は、バルト海の運輸・物流の拠点であるリガ港において、港湾ターミナル運営企業のリガ・ユニバーサル・ターミナル社を視察した。同社は、木材製品や冷凍食品貨物の分野で業界をリードし、対ロシア経済制裁により物流ルートを変更せざるを得ない企業の受皿となっている。

サミュエル・ヤップ最高経営責任者から、対露制裁前、リガ港はEUとロシアや中央アジアの間の物流の重要な拠点であったが、制裁後は、食料品を除きロシアとの取引は行われておらず、今後も中央アジアを成長のエンジンと捉えているが、爆撃を受けるリスクのあるウクライナとの接続をどう確保するかが課題である等の説明を受けた後、一行は、港湾施設等を視察した。

二十六日午前、一行は、インチュカルンス天然ガス地下貯蔵施設を視察した。同施設は、日本企業が出資しているコネクサス・バルティック・グリッド社が所有するもので、地下七百メートル付近に、需要の少ない夏に天然ガスを注入・貯蔵し、冬の需要を賄っている。

ウルディス・バリス最高経営責任者から、ウクライナ戦争により、現在、ロシアからの天然ガスの供給を停止し、主にノルウェー等から船で液化天然ガスを輸入し戦略的に貯蔵することで、ラトビアだけでなく、エストニア、リトアニア、フィンランド等にも供給している等の説明を受けた後、一行は施設内を視察した。

引き続き一行は、ラトビア占領博物館を視察し、館長等から説明を受け、同国が経験した歴史的苦難や独立に至る経緯等について更に理解を深め、平和への願いを込めて記帳した後、ラトビア在留邦人との夕食懇談会に参加し、意見交換を行った。

五、リトアニア共和国

(一) バルチーティーテ・リトアニア官房長官等との会談

二十八日午前、一行は、ギエドレ・バルチーティーテ・リトアニア官房長官等との会談のため、リトアニア内閣府を訪問した。リトアニア側からは、ヨナス・スルヴィラ外務副大臣が同席した。

バルチーティーテ官房長官は、両国が民主主義等の価値観を共有し、戦略的パートナーシップに基づき二国間関係を着実に深化させていることをうれしく思う旨述べたほか、ウクライナ問題や権威主義国家に対処するためには、同志国との協力の強化が不可欠であり、日本との関係を更に強化したい旨述べた。

長浜副議長は、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の維持・強化のためには、価値観や原則を共有する戦略的パートナーであるリトアニアを始め同志国との協力を一層強化することが重要との認識は官房長官と同じである旨応じた。

バルチーティーテ官房長官から、情報戦略を含め中露が連携を強化する中、地理的な距離が離れていても、リトアニアや日本、台湾など同じ考えを有する者同士が連携しながら、ウクライナ戦争の甚大な被害の責任はロシアにあることを追及し続けることが重要である等の発言があった。これに対し長浜副議長は、現下の世界情勢の原因を作り出している国が正しく罰せられなければならない、武力による現状変更に加え、フェイクニュースによる世論形成やサイバーテロにどう対処するか、志を共にする国の議員同士が顔を合わせ議論し、信頼関係を構築していくことが非常に重要であるとの意向を示した。また、山本議員から、八月二十四日に海洋放出を開始したALPS処理水をめぐり、中国からのフェイクニュースや嫌がらせ電話について言及したところ、バルチーティーテ官房長官は情報提供に謝意を示し、偽情報への対処についても力を合わせていきたい旨述べた。

(二) ミタラス・リトアニア国会副議長とのアンタカルニス墓地への献花

二十八日午前、引き続き一行は、ヴィタウタス・ミタラス・リトアニア国会副議長と共にアンタカルニス墓地を訪れた。同墓地には、第一次世界大戦以来、リトアニア人、ポーランド人、ロシア人ら多くの戦死者が埋葬されており、墓地の中心には、一九九一年一月十三日の「血の日曜日」と呼ばれるリトアニアの独立運動の際に犠牲となった方の墓があり、一行はミタラス副議長と共に献花を行い、独立のために命を懸けて戦った方々へ哀悼の意を表した。

(三) ミタラス・リトアニア国会副議長主催昼食会

引き続き、ミタラス副議長主催昼食会がインペリアルホテルにおいて開催され、リトアニア側からは、同副議長、アルーナス・ヴァリンスカス対日友好議員連盟会長を始め五名の議員が出席した。

ミタラス副議長は、長浜副議長一行をリトアニアにお迎えできたことを光栄に思うと歓迎の意を表し、この昼食会では議員同士が顔を合わせ、個人個人が親しみを感じる関係を深めていきたい旨挨拶した。

長浜副議長は、アンタカルニス墓地での共同献花及び昼食会への招待に謝意を示した上で、日本はロシア、中国と海を隔てて隣接しており、リトアニアとある種同様の緊張感を持っているとの認識を示したほか、今から百年以上前にリトアニアの政治家ステポナス・カイリース氏がリトアニア語で「日本論」を出版したことに感激した旨述べ、明日は母校の大先輩に当たる杉原千畝氏の記念館を訪問予定である旨紹介した。

その後、リトアニアにおける若手議員の活躍、両国議員連盟の活動、ロシアのウクライナ侵略に対するリトアニア及び日本国民の危機意識、森林保全のサイクル、障がい者への対応と介護保険制度、少子高齢化の進展と医療保険制度等について意見交換が行われた。

(四) ヴァリンスカス対日友好議員連盟会長等との会談

二十八日午後、引き続き一行は、ヴァリンスカス議連会長等との会談のため、リトアニア国会を訪問した。リトアニア側からは、同議連会長、ユルギス・ラズマ第一副議長を始め六名の議員が出席した。

会談冒頭、ヴァリンスカス議連会長は、昨年両国が外交関係樹立百年を迎えたことに触れ、この百年の間に、日本は軍国主義化と大戦を経て経済復興を遂げ平和を希求する経済大国となり、リトアニアは一九一八年に独立を宣言するも、一九四〇年にソ連に併合され、その後半世紀にわたる占領を経験し、一九九一年にソ連から独立を回復したことから、両国は共に複雑な経験を経て民主主義国家となったとの認識を示した。また、昨年日本リトアニア友好百周年記念行事のテーマが「きずな」であったことに触れ、自分も日本とのきずなを大切にし、温かい関係を築いていきたい旨挨拶した。

これに対し長浜副議長は、ヴァリンスカス議連会長は日本に留学経験があり、本年三月にはミタラス副議長等と共に訪日し、昨年の友好百周年レセプションでは大変心温まるスピーチをしていただいたと聞いているが、日本に精通している議連会長の存在は心強く、互いにきずなを大切にしながら、戦略的パートナーであるリトアニアとの関係を一層強化していきたいと応じた。

引き続き田名部議員から、ロシアによるウクライナ侵略を契機に食料安全保障の確立が課題であり、食料自給率が低い日本では家畜の餌、化学肥料、原料等を始め多くを輸入に頼っていることから、農業の生産現場への予算付けなど、与野党を超えて議論を行っている旨、川合議員から、ウクライナ侵攻による緊張感が高まる中、リトアニアがどのような問題意識を持って取り組んでいるのか学びたい旨、横山議員から、百年來の友好のきずなや自由と民主主義を共有する両国関係を一層強化したいと考えており、議連会員の皆様との懇談の機会を光栄に感じている旨、井上議員から、母が被爆者で自分は広島で育った被爆二世であり、核兵器がいかに人道に反するかを知っているからこそ、ロシアが核の脅しでウクライナを侵攻していることに強い憤りを覚え、この暴挙をやめさせるため国際社会がいかに力を合わせるか意見交換したい旨、それぞれ発言があった。

これに対しリトアニア側議員から、今年百歳で亡くなった母は杉原千畝氏の「命のビザ」取得を求めて領事館に並んだが、ソ連軍に阻まれた後、ナチスに捕まり収容所に送られたことを紹介し、同国が経験した歴史的苦難や独立への思いについて説明があったほか、長い歴史を通して育まれた両国議連の関係、高齢社会への対応、文化行事等を通じた相互理解の重要性等について、意見交換が行われた。

(五) チュミリーテ・ニールセン・リトアニア国会議長等との会談

二十八日午後、議連との会談に引き続き一行は、ヴィクトリヤ・チュミリーテ・ニールセン・リトアニア国会議長と会談した。リトアニア側からは、同議長、ミタラス副議長、ヴァリンスカス議連会長等五名が出席した。

会談冒頭、チュミリーテ・ニールセン議長は、民主主義や法の支配など普遍的価値観を共有する両国は昨年日本リトアニア友好百周年を経て、新たな挑戦の百年に入ったとの認識を示し、百年の節目の年に、両国の関係が戦略的パートナーシップに格上げされたことにより、今後も幅広い分野で協力関係が強化されることを期待する旨述べた。

長浜副議長は、本日の昼食会や会談の場で、副議長、議連会長を始め、人間味あふれる貴国議員の皆様と率直に意見交換を行うことができたことを非常にうれしく思い、国民を代表する議員同士の結び付きは両国関係を豊かにすることから、議会間交流を積極的に進めていきたい旨述べた。これに対しチュミリーテ・ニールセン議長から、昨年十一月に議長に就任以降、日本の衆参両院との関係を深めたいと考えており、長浜副議長一行の訪問をうれしく思う旨、また本年十月下旬には自分も訪日を計画している旨発言があった。（その後、十月二十七日、同議長は参議院を訪問し、長浜副議長を表敬訪問した）。

リトアニア側議員から、日本が輸入を必要とする農産物について質問があり、田名部議員から、日本は食料自給率が低く、麦、大豆、家畜の餌など多くを輸入に頼る一方で、乳製品については牛乳廃棄の問題もあることを紹介し、このような事情を踏まえながら両国が発展できる協力関係を築きたい旨回答した。このほか、リトアニアのインド太平洋戦略、憲法上の制約がある中での日本のウクライナ支援、次回NATOサミットへのウクライナ参加に向けた働きかけ等について意見交換が行われた。

会談終了後、一行はリトアニア国会儀典長の案内により、新旧本会議場を視察した。（旧本会議場は、一九九〇年三月十一日に国家の主権回復行使が宣言された場所であり、新本会議場の建設後も当時のまま保存されている）。

(六) リトアニアにおける現地視察等

二十九日午前、一行は、リトアニア第二の都市カウナスにある杉原記念館を訪問した。同記念館は、ユダヤ系避難民等に対し「命のビザ」を発給した杉原千畝副領事が勤務した旧在カウナス日本領事館の建物を使い、リトアニアにおいて設

立された杉原「命の外交官」財団により運営されている。なお、リトアニアでは、杉原氏の勇気ある行動を後世に残す様々な取組が行われており、杉原氏の生誕百二十年及び「命のビザ」発給八十周年の二〇二〇年を「杉原千畝の年」とすることがリトアニア国会で決議された。

記念館では、ラムーナス・ヤヌライティス館長の案内により、杉原氏が執務したその場所で、発給したビザの一覧、杉原氏が使用していた執務机の複製、杉原氏によりビザの発給を受けた人々が残した資料、写真等を目の当たりにし、職を賭した判断で約六千人の命を救った杉原氏の勇気と功績に思いをはせ、世界の平和を願い記帳した。

また、コロナ禍による観光客及び入場料収入の激減により同記念館が厳しい財政状況にあることに鑑み、長浜副議長は団を代表し支援金を贈呈した。

引き続き一行は、ヤヌライティス館長、ラムーナス・ガルバラビチュウス・杉原「命の外交官」財団理事長等六名を招き昼食会を行った。

冒頭、長浜副議長は、杉原氏と同じ大学出身であり、本年六月には母校で杉原氏に関する歴史特別展が開催され、また、二〇一一年には大学内に杉原千畝顕彰碑を建て、日本政府を代表して挨拶したことを紹介し、杉原「命の外交官」財団理事長及び関係者の皆様が杉原氏の功績を後世に残そうと努力されていることに敬意と感謝の意を表した。

これに対しガルバラビチュウス理事長から、人道の精神をもって多くの命を救った杉原氏の勇気ある行動を忘れてはならず、歴史を残すためにこの記念館を支えており、コロナ禍による財政難も経験したが、日本からの支援に感謝しつつ、今後もこの大切な記念館を維持していく旨挨拶があった後、参加者は杉原氏の功績に思いを巡らせながら懇談を深めた。

昼食会に引き続き一行は、ヴィータウタス・マグヌス大学（カウナス市所在の国立総合大学）を訪問した。カウナスは杉原千畝氏の名が広く知られる街であり、日本語学習に関心の高い若年層が多く、同大学では日本語講座が開設され、複数の日本の大学と協定を結んでいる。一行は、ユオザス・アウグティス学長から同大学における日本語教育の概要について説明を受けた後、教授及び日本語を学ぶリトアニア人学生と懇談を行った。

その後一行は、第二次世界大戦時、ナチスにより五万人の大量虐殺が行われた旧ユダヤ人収容所（第九要塞）を視察し、約十日間にわたるバルト諸国での全ての日程を終了した。

六、終わりに

今回の公式派遣は、ウクライナ戦争が継続する状況下でのバルト諸国訪問であった。ロシアと国境を接し、ソ連等による占領の歴史を経て独立を達成したバルト諸国を実際に訪問し、いずれの国もロシアに対して極めて高い警戒感を有しながら、ウクライナの現状は「明日は我が身」との強い危機感を持ってウクライナと共に闘い、支援していることを肌で感じる事ができた。加えて、会談等におけ

る議論を通じ、日本と各国が価値観と原則を共有する同志国であり、平和秩序を守り抜くためにこれまで以上に連携を強化していくことを、議員同士が直接顔を合わせ確認したことは、今回の派遣の成果の一つであると考えている。

国民を代表する各国議員同士の信頼関係は、生身の人間たる政治家同士が議論を重ね、長い年月を経て確立されるものであるが、このたびの訪問が、バルト諸国議会との協力・信頼関係の更なる強化に寄与したものと確信する。

最後に、今回の派遣に際し、各国議長を始め訪問各地の関係者及び各国日本大使館の大使・館員等多くの方々から多大な御支援と御協力を頂いたことに、心から御礼を申し上げ、本報告を終える。